

第43回関西蔵前懇話会

2016.11.17 茅野文昭 (S52 機械)

「茶の歴史と千利休」

1. 茶の伝来

- 唐の陸羽が書いた『茶経』により、中国から初めて茶の知識が伝わってきたとされている。
- 『茶経』には、茶の木の育て方、収穫方法と道具、たてかた、飲み方、歴史を記載
- 喫茶あるいは闘茶が一般庶民の間に流行したのは、平安時代末から鎌倉時代へかけて起こってきた伝統

2. 茶の栽培の始まり

- 1191年、臨済宗の開祖**栄西禅師**が宋の国から持ち帰った茶の種を佐賀県の**吉野ヶ里****霊仙寺**の畑にまいたのが始まり

3. 茶カブキ

- 茶カブキは鎌倉時代から室町時代に流行した『闘茶』という茶の種類を飲み当てる一種の遊びが起源にできた。
- 茶の栽培が盛んになったころ、土地などによる風味を当てる遊びが生まれた。
- 『闘茶』には、梅尾の茶を「本茶」、それ以外の茶を「非茶」として飲み当てるものや、四種類の茶を点て飲み当てるものなど、

4. 「飲時」：お茶はいったいどんな時に飲むのが一番ふさわしいのか

- 心身ともに余裕のある時
- 読書作詞に飽きた時
- 気分がいらいらしている時
- 歌や音楽を鑑賞する時
- 歌や音楽が終わった時
- 門を閉じ世間を避けている時
- 琴を弾いたり絵を見る時
- 夜もふけてともに語る時
- 明るい窓辺のきれいな机に向かう時
- 奥座敷や見晴らしのよい楼閣にいる時
- 客と主人が団欒している時
- よい客やかわいい女性といる時
- 友を訪ねて帰ってきた時
- 風がおだやかで天気の良い時
- うすぐもりでこぬか雨が降る時
- 小さな橋のもとに舟を停めている時
- 花を手入れし小鳥の世話をしている時

5. “さび” と “わび”

世阿弥と利休

- ・利休は金春流の太夫宮尾道三について謡を習ったことがあるばかりか、彼の後妻宗恩は道三の娘であったという伝えもある。
- ・利休がこの道三の好意によって金春禅竹の手に渡された世阿弥の伝書「風姿花伝」やまた「至花道」を見たときみなされる。
- ・利休の使った「炭の花」という言葉や彼が己が運命を予知して、切腹の一ヶ月余りに作ったと言われる
「枯のこる老木の桜枯折れて今年ばかりの花の一房」
の歌の中にも、世阿弥の花、残れる花の影響を見ることができる。
- ・世阿弥も利休もその背景には禅があり、世阿弥の最後に到達した境地の“さび”と利休が到達した境地の“わび”とは異質な要素が入っていると思われる。

6. 茶湯者としての利休

- ・1558年（弘治4年）、利休が37歳のとき三好実久の茶会に招かれたことから、堺において茶人としての地位が社会的に認められた最初である。
- ・利休が居士号をもらったとき、大徳寺の古溪和尚はそれを祝って伝書を送ったが、その序に「泉南之放全斎宗易居士三十年飽参之徒也」と書いている。
- ・利休が放全斎を号したのもおそらくこの前後である。

7. 信長と利休との出会い

- ・1568年（永禄11年）、信長の威に屈して自由都市堺は二万貫の軍資金に応じ、やがて信長の直轄地となって松井友閑が奉行となって乗り込むに及んで、堺の立場は変わらざるを得なくなった。
- ・堺の豪商たちは相次いで信長と友好関係を結び自己保全の道を計った。
- ・1570年（元亀元年）4月に今井宗久が信長の御前で、利休の手前による薄茶を賜った。
- ・利休はこのとき49歳、信長は37歳である。
やがて利休は茶堂として信長に仕えた。天下の堺商人にして高い文化人が、天下をねらう武人に教師格として奉仕したのである。

8. 利休とその時代の主要人物の生没表

足利義満	1358年（延文3年）生れ	1408年（応永15年）没
世阿弥	1363年（正平18年）生れ	1443年（嘉吉3年）没
一休禅師	1394年（応永元年）生れ	1481年（文明13年）没
織田信長	1534年（天文3年）生れ	1582年（天正10年）没
千利休	1522年（大永2年）生れ	1591年（天正19年）没
豊臣秀吉	1536年（天文5年）生れ	1598年（慶長3年）没

参考文献

「千利休」：唐木順三著（筑摩書房）

「お茶のある暮らし」：谷本陽蔵著

茶の需給

茶類の国内消費量の推移

単位:t

	緑茶	紅茶	ウーロン茶	合計
S55	104,027	7,599	4,232	115,858
60	95,953	8,086	12,568	116,607
H元	92,719	13,516	14,478	120,713
2	91,558	14,102	17,154	122,814
3	90,460	13,345	20,365	124,170
4	96,362	14,094	22,803	133,259
5	97,276	12,699	19,123	129,098
6	90,837	14,187	22,050	127,074
7	90,806	17,834	20,996	129,636
8	99,096	16,585	21,011	136,692
9	102,008	19,783	21,186	142,977
10	88,347	18,340	20,579	127,266
11	99,792	13,807	23,415	137,014
12	102,944	17,950	25,495	146,389
13	106,940	16,500	27,136	150,576
14	95,228	15,029	24,668	134,925
15	101,382	15,500	21,389	138,271
16	116,823	16,299	22,903	156,025
17	114,091	15,445	20,730	150,266
18	101,478	17,128	19,714	138,320
19	102,066	16,603	21,110	139,779
20	101,125	17,860	17,922	136,907
21	89,905	17,399	16,544	123,848
22	88,674	19,757	17,612	126,043
23	87,106	19,802	16,776	123,684
24	91,122	16,638	15,624	123,384
25	86,733	15,648	15,629	118,010

話題2 国内緑茶生産量ベスト10

2015年06月08日

●日本の緑茶生産量ベスト10

2014年の日本の緑茶（荒茶）生産量ベスト10をご紹介します！ 緑茶はチャノキの葉を収穫し、蒸した後乾燥させて、まず荒茶が作られます。その後問屋などで選別・ブレンド等をされ、市場に出回ります。紅茶や烏龍茶、プーアル茶とは味わいが全く違いますが、実は同じ茶葉から作られています。殺菌効果のあるカテキンが入っており、健康志向の強い欧米でも最近人気ですが、海外では砂糖を入れて飲むことが多いようです。

緑茶の生産量第1位は、ご想像の通り静岡県で、国内のおよそ4割の緑茶が静岡産です。第2位は鹿児島県で、こちらは生産量の3割を占めています。静岡県が静岡茶をブランド化できたのに対し、鹿児島県はブレンド用の緑茶を長年生産してきたため、知名度が今一つで、驚かれた方も多いかもしれませんね。宇治茶に代表される京都府は生産量がそれほど多くなく5位に留まっています。茶葉不足解消のため、今日販売されている宇治茶に使われる茶葉は京都府産の他に三重、奈良、滋賀の各県産茶葉が混合されています。

こだわりブログ、
はじめよう。



1位	静岡県	33,100 t
2位	鹿児島県	24,600 t
3位	三重県	6,770 t
4位	宮崎県	3,870 t
5位	京都府	2,920 t
6位	福岡県	2,160 t
7位	奈良県	1,810 t
8位	佐賀県	1,350 t
9位	熊本県	1,300 t
10位	愛知県	908 t

26	84,164	15,443
27	78,846	15,586

話題3 茶類別消費量推移グラフ

(注) 緑茶は、国内供給量(国内生産量+輸入量-輸出量)を、紅茶及びウーロン茶は、輸出量の区分分け出来ないため輸入数量をそれぞれ消費量とした。

茶類の消費量の推移

